

## 九州中央山地におけるニホンジカのホームレンジ\*1

矢部 恒晶\*2 · 小泉 透\*2 · 遠藤 晃\*3 · 関 伸一\*2 · 三浦 由洋\*4

## I. はじめに

九州地域におけるニホンジカの生息環境の利用様式を知ることは、本種の生態を理解する上で、また地域におけるシカ個体群の保護管理施策の基礎としても重要である。しかし九州では長崎県野崎島(2)など島嶼部でホームレンジ等について知見があるにすぎず、生息地が広がりを持つ九州本土におけるシカの生息地利用についてはほとんど不明である。筆者らはシカのホームレンジと生息地利用のパターンを明らかにするため九州中央山地で個体追跡を開始したが、雌雄のホームレンジについて最初の情報を得たので報告する。

## II. 調査地域および調査方法

調査地域は宮崎県椎葉村の九州大学宮崎演習林大藪川流域およびその西側に隣接する一ツ瀬川流域である(図-1)。標高800-1200mの山地で、ブナ、モミ、アカマツなどからなる天然林とスギ・ヒノキ造林地が混在する。当地域は九州山地の中でもシカの高密度分布域のひとつと考えられている(4)。

大藪川流域で箱ワナを3カ所設置し、1999年12月に捕獲を行った。捕獲した個体は麻酔保定し、各部計測の後、成獣については首輪型発信器を装着し、その場で放逐した。追跡個体の位置は原則として3時間から10日間程度の任意の間隔で測定した。

## III. 結果

12月1日にオス成獣(M1)およびメス成獣(F1)それぞれ1頭を捕獲し、発信器を装着した。M1の発信は2000年5月26日、F1の発信は6月15日を最後に確認できなくなった。F1については防鹿ネットに絡まり死亡していたのが7月7日に確認された。この期間にM

1について45点、F1について50点の位置を記録した。記録地点の外郭を囲んだ累計面積はM1で約100日、F1では約80日で安定した(図-2)。これらの最外郭を囲んだ面積をホームレンジとすると、M1で約201ha、F1で約33.6haとなった。植物の出葉による食餌環境の変化を考慮し、追跡期間を12月から2月までの冬期と3月以降の春期に分けると、M1、F1ともに春期のホームレンジが冬期のホームレンジよりも小さい傾向があった(図-3)。F1は調査期間を通じて大藪川沿いの緩やかな谷にホームレンジを持ち、冬期と春期で利用中心の大きな変化はなかった。この個体は0歳仔(性別不明)および1歳の娘と考えられるメス個体と共に目撃されることがあり、また死亡時には胎児を持っていた。M1は12月6日まではF1のホームレンジと一部重複する区域に滞在したが、12月9日までは尾根を越えて一ツ瀬川流域の比較的急峻な谷(西約2km)に移動した。以後は主にこの谷を利用する一方、まれに大藪川流域に入ることもあった。1月17日にM1を大藪川流域で確認したが、その後2月16日に一ツ瀬川流域の谷で再発見するまで、M1の電波は広域の探索にもかかわらず受信できなかった。春期にはM1は一ツ瀬川流域の谷に滞在し続けた。M1およびF1のホームレンジ内で記録点と比較的多い区域にはともに比較の日当たりが良いと思われる南西向きの斜面が含まれた。

## IV. 考察

F1のホームレンジは野崎島におけるメスのホームレンジ(3.03-3.6ha)(2)と比べると約10倍であった。生産力の高いシバ草原に高密度でシカが集中する野崎島に比べ、本調査地では食物資源は散在しており、生息密度も島のように空間利用に制約が出るほど高くないことがその理由として考えられる。房総半島における冬期の

\*1 Yabe, T., Koizumi, T., Endo, A., Seki, S. and Miura, Y.: Home range of sika deer in the central mountains in Kyushu

\*2 森林総合研究所九州支所 Kyushu Res. Center, For. and Forest Prod. Res. Inst., Kumamoto 860-0862

\*3 熊本県立大学環境共生学部 Fac. of Env. and Symbio. Sci., Pref. Univ. of Kumamoto, Kumamoto 862-8502

\*4 福井県総合グリーンセンター Fukui Pref. General Green Center, Maruoka, Fukui 910-0336

メスのホームレンジは20.8-152.3haで、F1と同程度のレンジを持つ個体も記録されている(1)。春期にホームレンジが縮小したことも報告されているが、草草が存在していたため小さい行動圏でも十分な食物が確保できたことが理由のひとつとされている。当調査地でも春期にホームレンジが小さくなったが、それらは南西向き斜面を含んでおり、春期に餌の豊富な場所を選択している可能性が考えられる。

M1に見られた滞在域のシフトは、交尾期にメスの分布する場所へ移動していたオスが、交尾期終了後に交尾期以外の季節における生息域へ戻る行動だった可能性がある。日光でも交尾期におけるオスの移動が観察されている(3)。一方M1およびF1は、積雪地帯の日光や北海道で報告されているような越冬地への移動・分散(3, 5)に相当するような初冬期・春期の移動はしなかった。

死亡したF1から回収した発信器はケースが劣化して破損していたため、M1の発信器も5月には同様な理由で故障したと考えられた。しかし1-2月に位置が不明だった期間の前後にM1の発信音に異常はなかったため、M1はこの期間に一時的な遠距離移動をした可能性がある。しかし通常利用する区域という意味でのホームレンジは図-3に示した範囲と大きく変わらないと思われる。このような一時的な遠出は房総半島でも観察されている(1)。

以上いくつかの観察例が得られたが、今後さらにシカの捕獲を行い、複数頭について各季節を通じたホームレンジおよび生息地利用パターンの記録を蓄積する必要がある。

引用文献

- (1) 千葉県環境部・房総のシカ調査会：千葉県房総半島におけるニホンジカの保護管理に関する調査報告書, 3, 1995
- (2) Endo, A., Doi, T.: Mammal Study 21, 1, 27-35, 1996
- (3) 丸山直樹：東京農工大学農学部学術報告, 23, 1-85, 1981
- (4) 常田邦彦：林業技術, 680, 27-30, 1998
- (5) Uno, H., Kaji, K.: Mammal Study 25, 1, 49-57, 2000

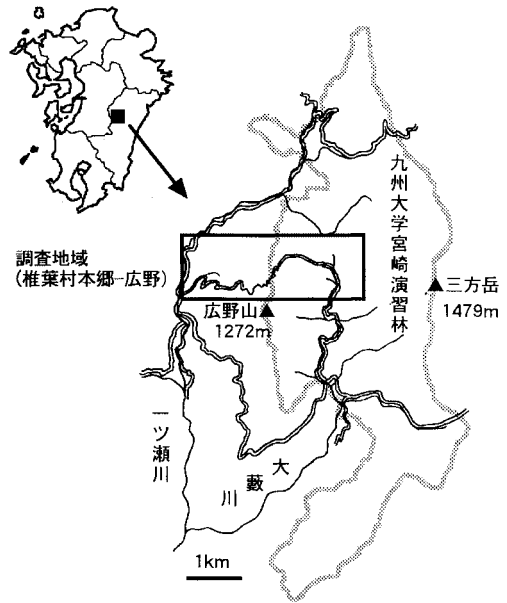


図-1 調査地域

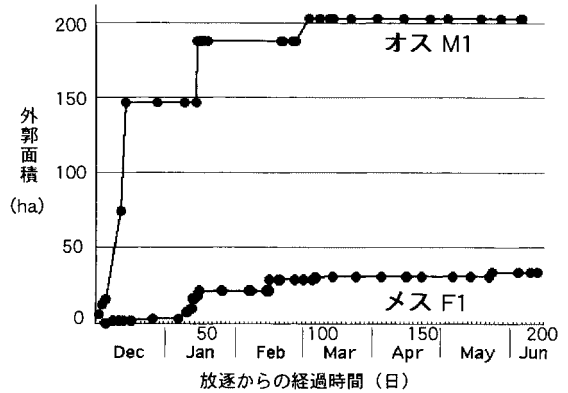


図-2 外郭面積の拡大状況

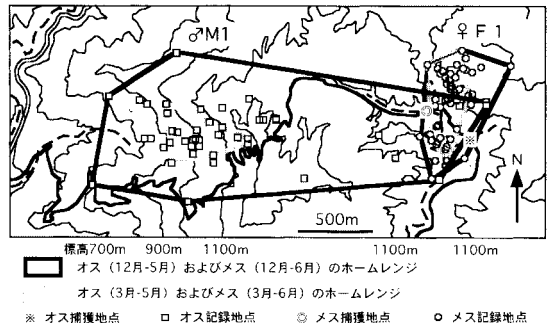


図-3 発信器装着個体のホームレンジ